

団結一心、地区の防災と活性化

東日本大震災から6年経った、地震に伴い、津波などの被害も深刻だった。その時被害を受けた地域はまだ復興の途中である。

一宮町は現在、町役場による定期的な防災訓練や防災教育が行われている、これは低海拔の海岸町にとって、とても重要な行事である、しかし、災害時に戦力となる若者たちはこのような訓練や教育に参加しないことが分かった。そのために”一宮町地区防災組織”が立ちあかった。

在 311 事件(東日本大地震)6 年之後，至今地震與海嘯所造成的傷害依然存在。各個受災地目前都還走在重建的路上。

其中千葉縣一宮町的區公所正在加強當地的防災演習與防災教育。這個項目對於位處低海拔的區域而言，是非常重要的例行事項。但是最能夠在災難發生時成為助力的年輕族群卻顯少參與這樣的訓練，「一宮町地區防災組織」便是為了解決這樣的現況而成立的組織。

この活動を始めたのは一宮町在住の渡辺征二さん。今は退職状態の渡辺さんは、一宮町は地理的には東北三県海岸沿いの町ととても似かよっていると感じ、”自分たちの地域は、自分たちで守る”と言う精神に基づいて、周囲への呼びかけを始めた。

自主防災組織とは、全住民による防災活動を効果的に行うための組織である、地区の事業として行われている。大災害が発生するときに、自主防災組織が中心となり、区民をいち早く安全な場所へ避難しさせ、犠牲者を出さない地域とするための試みである。 とはいえ、一体どうやって区民たちに防災訓練に参加させているのか。

いきなり防災のような固いイベントからではなく、地区の祭り、神楽奉納、花火大会などから始め、徐々に区民たちと親しくなる。そうすると避難訓練や防災教育などの活動もよりやりやすくなる。

自然災害にみならず、火事への対応、心肺蘇生法の操作なども重要なポイントである。

最初が一番人を集めるイベントから始め、徐々に区内の人たちとの絆を結んでいく、そして防災意識を身につけさせ、この町に住んでいる人々全員の命を保障することを目指している。

「一宮町地區防災組織」的創辦人是當地的退休人士，渡邊征二。渡邊先生認為一宮町的地理環境與 311 時受到極大傷害的東北三縣沿海地連非常相似，他說道：「自己居住的土地，應該要自己用雙手保護。」憑藉著這樣的理由，他開始招集住在附近的居民一起關注當地的防災事務。

所謂的自主防災組織所指的是，由當地居民所組成，目的在於當災害發生時，能夠迅速有效率的採取對策而成立的，同時作為在地的公益組織而存在。最大的目標是在不犧牲任何一個生命的前提下避過所有災難。

但是最大的難題在於，究竟該如何讓居民們一同參加組織所舉辦的防災訓練呢？

對於這點，一宮町所採用的策略是協助籌辦在地的祭典、宗教活動、煙火大會等等，讓居民先熟悉組織的存在，再進而邀請所有人一同致力於防災演練與教育的推廣。不僅僅是應對自然災害，同時也推出火災逃生守則、心肺復甦術等等課程。

先從能匯集人潮的活動開始做起，慢慢地凝聚整個社區的向心力，再將防災的意識融入生活之中，從而使整個地區的居民生命都受到保障。

同じく地震大国の台湾はどうか。

台湾は 17 年前 921 大地震により、大きな被害を受けた。倒れたビルや亡くなった命は数えきれない。その翌年、学校での防災教育は全国で行われている。

単なるの避難訓練ではなく、各災害への避難法、常時の準備、非常時の対応、詳しく生徒に教えて、小さい頃から災害への対策を身につける、このようなやり方も今後日本の防災教育にとって、一つのいい例として、参考になるでしょう

同樣作為地震頻發國的台灣又是如何直向相關的政策的呢？

台灣在 17 年前曾經發生過 921 大地震，當時因為大樓倒塌等等事件而身亡的人數已不可計算。而從事發第二年開始，全國的中小學都開始實行防災演練。

台灣的防災演練不僅應對地震，也包還火災、台風等等自然災害，從事前準備、事中應對一直到事後處理都有詳盡的流程教育。將這些課程加入義務教育的方式是非常適合日本政府參考並實行的一件優良案例。